

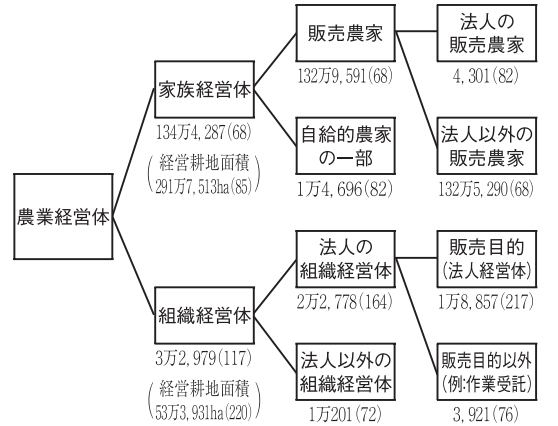
競争力強化とセンサス分析を特集

16年度食料・農業・農村白書

政府は5月23日、16年度の食料・農業・農村白書(配書)を閣議決定した。巻頭の特集では、「日本の農業をもっと強く農業競争力強化プログラム」と「変動する我が国農業と」をとり上げ、2015年農林業センサスから「」を取り上げている。

位部門は、野菜と畜産が大部分。基幹的農業従事者の平均年齢は、全国平均(67歳)よりも低い傾向にあり、全国に比べ若い農業者が大きな役割を果たしている。うち8市は、総面積の過半が中山間地であり、条件振り地域を多く抱えつつも、農業生産が盛んな地方公共団体が存在していると指摘している。

2015年農林業センサスによる農業経営体の内訳



注: 数値は2015年の経営体数。括弧内の数値は2005年=100としたときの指数。

第2章 強い農業の創造に向けた取り組み
 (トピックス) 画期的なAI、IoT、ロボット技術の活用による生産性向上
 農業分野のAI(人工知能)、IoT(インターネット)で様々な情報がつながる仕組み、ロボット技術の現段階と今後の対応について記述している。また、主要農畜産物の生産等の動向、生産物

第3章 地域資源を活かした農村の振興・活性化
 (トピックス) 中山間地域農業にもっと光をく地域農業の「宝」を活かした新たな挑戦
 耕地面積と農業産出額がそれぞれ約4割を占める中山間地域農業の現状と課題、地域の特色を活かした多様な取り組みへの支援などについて、優

第4章 大規模災害からの復旧・復興
 (トピックス) 大きな爪痕を残した自然災害、早期復旧を実現した取り組み
 熊本地震や一連の台風による農林水産業の被害状況と早期の復旧を実現した様々な取り組み、東日本大地震からの復旧・復興について取り上げている。

市町村8割超が達成見込み

17年産米の生産数量目標

農水省は5月26日、17年産の主食用米及び飼料用米等の非主食用米の作付け動向について、取り組み状況を公表した。市町村を単位とする米産地の8割超が主食用米の生産数量目標を達成できると見込んでいる。

同省は3月に、都道府県段階の作付け意向(2月末時点)を公表した。今回、都道府県別に加え、主に市町村レベルで生産調整を担う「地域農業再生協議会」別の4月末時点の作付け動向を取りまとめた。

流通現場の技術革新等の推進に触れている。
 産数量目標の達成が見込まれるのが3府県(同3県減)、計36都道府県が達成見込みで前回と同数だった。
 都道府県別の転作物と、18年6月末の民間在庫量が182万トまで減り、米価が安定すると思われる水準(180万ト)に近づく。18年産以降は、行政による生産数量目標の配分は廃止され、生産者や集荷業者・団体が需要に応じた生産を行う。

入植70周年を祝う

青森県六ヶ所村庄内地区

青森県上北郡六ヶ所村 庄内地区の入植70周年記念式典並びに祝賀会が、5月21日に挙行された。

会場となった同村鷹架の「スパハウス」には、開拓者・その後継者、開拓組

者、来賓
 ⑤五十嵐委員長



織関係者ら約100名が出席し、70周年を祝った。式典は、物故者に黙とうを捧げた後、五十嵐洋臣・庄内入植70周年記念事業実行委員会委員長(庄内自治会長)が主催者挨拶。五十嵐委員長は、「当庄内地区は、山形県より昭和22年5月22日に第一次先遣隊、翌23年に第二次隊が入植。以来、幾多の困難を乗り越え、昭和50年代には一大酪農郷を築いた。そこには、統率力と強い指導力で庄内開拓農協の初代組合長を25年務めた佐藤繁

作氏と、二代目組合長で六ヶ所村長を務めた土田浩氏の功績が誠に大きく、今も語られている。現在の畜産農家は、酪農家19戸、肉牛農家2戸、和牛繁殖農家6戸と、以前より様変わりしている。現状で、時代の流れを表している。一方、世帯数は55戸、男性91人、女性77人、合わせて168人。人口の減少がひしひしと押し寄せているが、先達から受け継いだ開拓の光の輝きは薄くなっても絶やすることなく、住みよい地域を目指し、次世代につなげていく」と述べ、祝いを述べた。

乳用種(有)池田畜産 交雑種 野田丈浩氏 黒毛和種 牧原牧場(株) 薩州開拓農協 肉牛共進会

薩州開拓農協は5月19日、熊本県錦町のゼンカIMIT(株)で第9回肉牛共進会を開催した。出品は乳用種11頭、交雑種17頭(去勢11頭、雌6頭)、

黒毛和種6頭(去勢3頭、雌3頭)の計34頭。審査の結果、乳用種の部は(有)池田畜産、交雑種の部は野田丈浩氏、黒毛和種の部は牧原牧場(株)の出品牛がそれぞれ最優秀賞を受賞した。

乳用種最優秀賞牛は19・9ヵ月齢で、DGI・43、枝肉重量488・4・4、BMS No.3、格付C MS No.12、格付A5だった。

- 22日 肥後開拓農協第9回通常総会
- 23日 ゆうき青森農協第7回通常総代会
- 25日 松山開拓農協第69回通常総会
- 26日 佐賀県開拓畜産事業第1回通常総会
- 27日 福岡県畜産農協第45回通常総会
- 28日 開拓ながさき農協第8回通常総会
- 29日 静岡県開拓農協連第69回通常総会
- 30日 兵庫県開拓農協連第68回通常総会
- 7月 九州参事会議北海道視察(〜5日)

開拓組織の動き

6月後半から7月上旬にかけて予定されている、開拓組織・関係機関の主な行事は次のとおり。

6月

- 16日 全国開拓振興協会第5回定時総会
- 全日本開拓者連盟第72回通常総会
- 17年度開拓畜産・酪農生産基盤強化事業説明会(東京)
- 19日 同事業九州地区説明会(福岡)
- 20日 ジャパンビーフ農協第17回通常総会
- 新生酪農(株)定時株主総会
- 中央酪農会議定時会員総会

米若年層、野菜への関心高い

日米都市住民の意識調査

図 野菜に対する考え方や行動

33%	一般的に言われている成人が1日に食べるべき野菜の量を知っている	67%
29%	多少高くても質の良い野菜を買うようにしている	54%
64%	野菜が好きだ	87%
27%	野菜が食べられない時は、野菜ジュースなどを飲むようにしている	33%
72%	野菜を積極的にとりたい	74%

日本(首都圏)N=1000

アメリカ(NY周辺)N=1000

「日本とアメリカとの野菜摂取に関する意識調査」の結果を公表した。同調査は、日本(首都圏)とアメリカ(NY周辺)で行ったもので、野菜摂取に関する意識や行動について、日米の若年層(20代)と中高年層(40代)の意識を比較している。

野菜が好きな人は、日本が87%、アメリカが87%とほぼ同等。野菜が食べられない時は、野菜ジュースなどを飲むようにしている人は、日本が27%、アメリカが33%と、日本の方が低い。野菜を積極的にとりたい人は、日本が72%、アメリカが74%と、日本の方が低い。

野菜の年別別に見ると、日本は60代の平均2.4皿、アメリカでは30代の平均3.1皿、60代の平均2.1皿と、日本は60代で野菜摂取量が少なくなっている。一方、野菜を積極的に摂りたいか聞いたところ、日本は「摂りたい」と答えた人が66%、アメリカは「摂りたい」と答えた人が74%と、日本の方が低い。

野菜をどのように調理して摂るか聞いたところ、日本は「サラダ」が最も多く、アメリカは「炒め料理」が最も多く、日本の方が「サラダ」が好まれる。

野菜をどのよう調理して摂るか聞いたところ、日本は「サラダ」が最も多く、アメリカは「炒め料理」が最も多く、日本の方が「サラダ」が好まれる。

野菜をどのよう調理して摂るか聞いたところ、日本は「サラダ」が最も多く、アメリカは「炒め料理」が最も多く、日本の方が「サラダ」が好まれる。

野菜をどのよう調理して摂るか聞いたところ、日本は「サラダ」が最も多く、アメリカは「炒め料理」が最も多く、日本の方が「サラダ」が好まれる。

野菜をどのよう調理して摂るか聞いたところ、日本は「サラダ」が最も多く、アメリカは「炒め料理」が最も多く、日本の方が「サラダ」が好まれる。

図 「体に良い食生活」を意識しているか

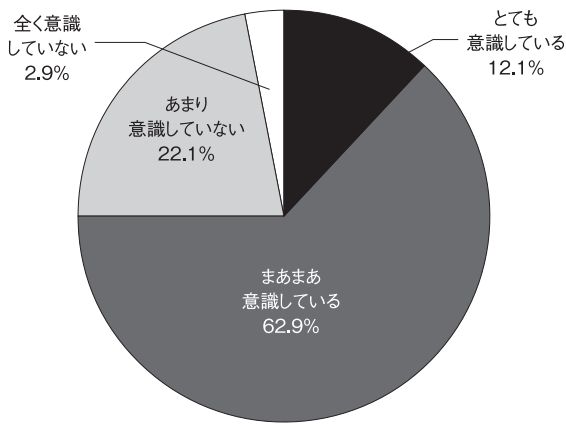


表 毎日の食生活で気をつけていること、継続していることは? (単位: %)

1位	牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける。	43.5
2位	朝・昼・晩と三食きちんと食べている。	42.0
3位	野菜中心の食事を心掛ける。	41.5
4位	水をこまめに摂取するようにしている。	28.7
5位	食べ過ぎ・カロリーの取りすぎに気をつけている。	27.4
6位	塩分を控えている(薄味にしている)。	22.6
7位	夜遅い時間に食べ過ぎないようにしている。	21.2
8位	好き嫌いや偏食をせず、バランスのいい食事を心掛けている。	16.1
9位	野菜ジュースを飲んでいる。	15.8
10位	なるべく食事は手作りしている。	15.1

「体に良い食生活」を意識している人は、62.9%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。野菜中心の食事を心掛ける人は41.5%、水をこまめに摂取するようにしている人は28.7%、食べ過ぎ・カロリーの取りすぎに気をつけている人は27.4%、塩分を控えている(薄味にしている)人は22.6%、夜遅い時間に食べ過ぎないようにしている人は21.2%、好き嫌いや偏食をせず、バランスのいい食事を心掛けている人は16.1%、野菜ジュースを飲んでいる人は15.8%、なるべく食事は手作りしている人は15.1%。

「体に良い食生活」を意識している人は、62.9%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。野菜中心の食事を心掛ける人は41.5%、水をこまめに摂取するようにしている人は28.7%、食べ過ぎ・カロリーの取りすぎに気をつけている人は27.4%、塩分を控えている(薄味にしている)人は22.6%、夜遅い時間に食べ過ぎないようにしている人は21.2%、好き嫌いや偏食をせず、バランスのいい食事を心掛けている人は16.1%、野菜ジュースを飲んでいる人は15.8%、なるべく食事は手作りしている人は15.1%。

「体に良い食生活」を意識している人は、62.9%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。野菜中心の食事を心掛ける人は41.5%、水をこまめに摂取するようにしている人は28.7%、食べ過ぎ・カロリーの取りすぎに気をつけている人は27.4%、塩分を控えている(薄味にしている)人は22.6%、夜遅い時間に食べ過ぎないようにしている人は21.2%、好き嫌いや偏食をせず、バランスのいい食事を心掛けている人は16.1%、野菜ジュースを飲んでいる人は15.8%、なるべく食事は手作りしている人は15.1%。

「体に良い食生活」を意識している人は、62.9%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。野菜中心の食事を心掛ける人は41.5%、水をこまめに摂取するようにしている人は28.7%、食べ過ぎ・カロリーの取りすぎに気をつけている人は27.4%、塩分を控えている(薄味にしている)人は22.6%、夜遅い時間に食べ過ぎないようにしている人は21.2%、好き嫌いや偏食をせず、バランスのいい食事を心掛けている人は16.1%、野菜ジュースを飲んでいる人は15.8%、なるべく食事は手作りしている人は15.1%。

「体に良い食生活」を意識している人は、62.9%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。野菜中心の食事を心掛ける人は41.5%、水をこまめに摂取するようにしている人は28.7%、食べ過ぎ・カロリーの取りすぎに気をつけている人は27.4%、塩分を控えている(薄味にしている)人は22.6%、夜遅い時間に食べ過ぎないようにしている人は21.2%、好き嫌いや偏食をせず、バランスのいい食事を心掛けている人は16.1%、野菜ジュースを飲んでいる人は15.8%、なるべく食事は手作りしている人は15.1%。

「体に良い食生活」を意識している人は、62.9%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。野菜中心の食事を心掛ける人は41.5%、水をこまめに摂取するようにしている人は28.7%、食べ過ぎ・カロリーの取りすぎに気をつけている人は27.4%、塩分を控えている(薄味にしている)人は22.6%、夜遅い時間に食べ過ぎないようにしている人は21.2%、好き嫌いや偏食をせず、バランスのいい食事を心掛けている人は16.1%、野菜ジュースを飲んでいる人は15.8%、なるべく食事は手作りしている人は15.1%。

「体に良い食生活」を意識している人は、62.9%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。野菜中心の食事を心掛ける人は41.5%、水をこまめに摂取するようにしている人は28.7%、食べ過ぎ・カロリーの取りすぎに気をつけている人は27.4%、塩分を控えている(薄味にしている)人は22.6%、夜遅い時間に食べ過ぎないようにしている人は21.2%、好き嫌いや偏食をせず、バランスのいい食事を心掛けている人は16.1%、野菜ジュースを飲んでいる人は15.8%、なるべく食事は手作りしている人は15.1%。

健康意識した食生活を実践7割

乳製品摂取が高い支持

アサヒグループホールディングス(株)はこのほど、全国の20歳以上の男女653人を対象にインターネットで実施したアンケート「健康を意識した食生活を実践しているか」の結果を公表した。

それによると、全体の75%が「健康を意識した食生活を実践している」と答えた。そのうち、最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

性では68.5%、女性では82.3%だった。家族の健康を考えて日々の食生活に気を配っている人は、43.5%と1位だった。次いで「朝・昼・晩と三食きちんと食べている」が42.0%、3位だった。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

「健康を意識した食生活を実践している」と答えた人は、75%と半数以上。最も意識しているのは「牛乳やヨーグルト、チーズなどの乳製品の摂取を心掛ける」で43.5%。

チェックシートで確認を

農作業時の熱中症予防

農水省は、農作業時の熱中症について注意を促している。農作業中の熱中症による死亡事故は、毎年20件前後で推移し、7、8月に高齢者等が屋外作業を行うときに集中して発生している。06年～15年の死亡事故は185件で、そのうち70～80代が全体の78%を占める。暑熱環境下での農作業は、とくに注意が必要となる。

農作業従事者では、同様の具体的な症状が分る。農作業従事者では、同様の具体的な症状が分る。

農作業従事者では、同様の具体的な症状が分る。農作業従事者では、同様の具体的な症状が分る。

農作業従事者では、同様の具体的な症状が分る。農作業従事者では、同様の具体的な症状が分る。

農薬危害防止運動を開始

使用前にもう一度ラベル確認

農水省の15年度農薬事故等防止することを目的に「17年度農薬危害防止運動」を実施している。目的は「17年度農薬危害防止運動」を実施している。目的は「17年度農薬危害防止運動」を実施している。

農水省の15年度農薬事故等防止することを目的に「17年度農薬危害防止運動」を実施している。目的は「17年度農薬危害防止運動」を実施している。



農水省の15年度農薬事故等防止することを目的に「17年度農薬危害防止運動」を実施している。目的は「17年度農薬危害防止運動」を実施している。

山梨県総合農業技術センター

夏秋ナス 整枝法で収量向上 うどんこ病の被害軽減

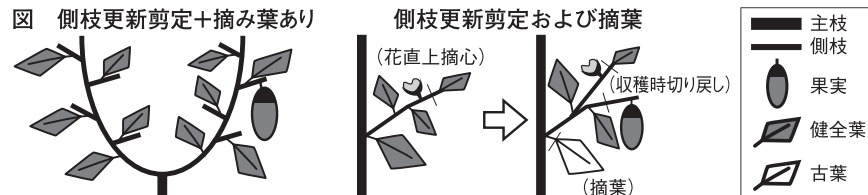
夏秋ナスなどの果菜類は、有機栽培で安定生産することが、病害虫の被害を受けやすく難しい。

山梨県総合農業技術センターは、夏秋ナスの有機栽培で上物収量が多い整枝の方法を明らかにした。

ナスは、1次側枝(中心の茎から側

方へ出る枝)や2次側枝の発生がさかんで、新梢や新葉が伸長・展開しやすい性質を持っている。その性質を活かし、整枝法や摘葉処理など管理手法の改善が収量性の向上及び病害虫の被害軽減に及ぼす影響を調査した。

播種期は4月下旬、定植期は6月下



旬、収穫期は7月下旬～10月下旬。栽植密度は714株/10a。施肥は、全量基肥で、いずれも3要素各30kg/10a(15年は25kg/10a)とした。

今回行った整枝法では、主枝から出た側枝を花の上で摘心するとともに、果実の収穫時に切り戻し整枝(側枝更新せん定)を随時行った(図)。古葉(老化葉)は積極的に摘除した。これにより、棚に新梢や新葉が常時広がっている状態となった。この状態と側枝更新せん定や摘葉を行わない場合と比べて生育後半、とくに9月以降の上物収量が多くなった。全体の上物率も15年、16年ともにおおむね80%となった。

表 整枝法の違いがナスの病害虫発生に及ぼす影響(2015、2016年)

整枝法	被害度(2015年)			被害度(2016年)		
	うどんこ病 ²⁾	チャノホコリダニ	アブラムシ	うどんこ病 ²⁾	チャノホコリダニ	アブラムシ
I	24.1±1.6	38.5±7.0	0	16.9±0.6	6.6±3.4	1.9±0.6
II	40.4±1.0	39.7±17.2	0	32.6±1.3	8.2±1.3	5.7±0.7
III	46.6±0.3	30.3±5.3	0	42.2±0.9	10.7±1.3	8.8±1.9

²⁾発病度=(1A+2B+3B+4D)/4n×100。A、B、C、Dは発病程度の分類による各発病葉数(n=40)。発病程度の調査基準:
[うどんこ病] 0:葉に発病が認められない。1:葉の1/4以下に発病が認められる。2:葉の1/4～1/2に発病が認められる。3:葉の1/2～3/4に発病が認められる。4:葉の3/4以上に発病が認められる。
※山梨県総合農業技術センターの資料を基に作成。

さらに、この整枝法により、うどんこ病の被害が軽減できることも分かった(表)。

同センターは、うどんこ病が少なくなった理由について、古葉や病葉を取り除くことにより病気の発生源が少なくなったことが原因ではないかと推測している。

また、この整枝法は慣行栽培にも応用することができ、減化学農業栽培など環境保全農業に役立つとしている。

鹿児島県農業開発総合センター

カボチャ 粘着テープで日焼け防止 作業時間、従来より60%削減

カボチャの日焼け果対策は、新聞紙で包んで被覆する方法が一般的である。しかし、作業時間が長くなることや破れてしまうこと等の問題がある。

鹿児島県農業開発総合センターは粘着テープを使用した場合、従来の作業時間よりも60%削減して、カボチャの日焼けを防止できる実験成果を公表した。

気象環境は、実験期間12日間で、そ

のうち2日間は豪雨となり、期間中の降雨は合計で334.0mmとなる条件下で行った。市販のクラフトテープ3種類を供試(資材A区、資材B区、資材C区)。果実の上面全体に幅広く供試テープを貼付した。対照は無処理区、新聞紙で包んだ新聞紙区とした。貼付や剥離の作業性は、同テープ3種類とも分断しやすく、貼付時の作業性及び実験終了時の剥離作業性に問題はなかつ

表 資材貼付等における作業性や果実の日焼け効果

試験区	貼付時の作業性	剥離時の作業性	貼付中の状態	テープ残留	日焼け効果	備考
無処理	○	○	-	-	1.0b	白化:2、褐変:2、くすみ:1
新聞紙	×	△	×	-	2.6a	果実を包むのに時間がかかる 降雨により新聞紙が破れ残骸残る
資材A	○	○	○	2.9a	2.7a	7個体中1個体に褐変あり
資材B	○	○	○	2.4b	2.8a	26個体中3個体に褐変あり
資材C	○	○	○	2.8ab	2.8a	8個体中1個体に褐変あり
評価	△			2	一部あり(20%以下)	ややあり
	×	問題あり	問題あり	1	一部あり(20%以上)	なし
分散分析				*	**	

注) **:1%、*:5%水準で有意差あり ※鹿児島県農業開発総合センターの資料を基に作成。

た。新聞紙は、テープに比べて貼付、剥離ともに作業時間がかかった(表)。貼付中は、供試テープ3種類とも剥がれることはなかった。新聞紙は降雨により破れた。

日焼け効果は、無処理区ですべて果実の表面に白化から褐変した。これに対して、供試テープ3種類は、果実のほとんどが日焼けすることはなかった。その中には、褐色するものもあったが商品化を落とす程ではなかった。

一方、新聞紙区は降雨で表面がボロボロになるものが多く、褐変して日焼けが発生した果実もあった。

同実験から、供試した3種類のテープをカボチャ果実表面に貼付することで日焼けを防止する効果が高いことが明らかになった。貼付作業もしやすかった。テープの種類によっては、テープ剥離後カボチャ果実表面に粘着物質

が残った。

一方、新聞紙では降雨により劣化し、破れた隙間に日焼けが発生し、効果が不安定であることが分かった。

また、気象環境が30℃以上の晴天時に同様の実験を行ったところ、新聞紙でも防ぐことができたが、褐変するものもみられた。粘着物質は、供試テープ1種類を除きほとんどなかった。テープを貼付することで光の紫外及び赤外域を大幅カット(73～90%)するため、無処理の果実に比べてテープを貼付した果実の表面温度が3～8℃低くなること分かった。

同センターは、資材費を10a当たり2000円程度とし、作業時間はテープ幅10cmの資材を使用した場合、貼付にかかる作業は8時間/10a程度で、新聞紙に比べて60%程度削減できるとしている。

トマト 栽培等 在来種マルハナバチへ促進 ハウス用UVカットフィルム使用に注意

農業用授粉昆虫として、外来種のセイヨウオオマルハナバチが利用されている。だが近年、生態系への影響を考慮し、在来種の代替が求められている。

農水省と環境省は、セイヨウオオマルハナバチの代替種の利用方針について全国3カ所で説明会を行った。在来種のマルハナバチへの転換には、国の補助事業が利用できるとし、地域ごとの在来種マルハナバチ代替種の利用方法、クロマルハナバチ転換時の問題点、利用環境の注意点等を説明した。

●セイヨウオオマルハナバチは、ヨーロッパ原産で92年から農業用資材として輸入された。その後年々増加し、06年には特定外来生物に指定。生態系に関わるリスクがあることからクロマルハナバチの出荷を99年から開始したが、15年の出荷量は、セイヨウマルハナバチの半以下となっている。クロマルハナバチは、本州、四国、九州で生息しているが、北海道や奄美大島等では、その地域にあった在来種のマル

ハナバチを利用する必要がある。

●クロマルハナバチの性能を調べたところ、花粉交配用としてセイヨウオオマルハナバチとそん色なく働くことが確認された。セイヨウオオマルハナバチよりおとなしく、オス蜂の発生が早い。しかし、巣箱の寿命が同じであることやUVカットフィルム下で活動が抑制されることがあると、注意を呼びかけた。農業用ハウスでUVカットフィルムを使用している場合、紫外線のカット率等によってはクロマルハナバチの活動を抑えるため、それぞれの販売業者に問い合わせることを勧めている。

両省は、在来種のマルハナバチへ転換するため、16年度から養蜂等振興強化推進事業を推進。今のところ、代替種に対する法律などの規制はない。20年までにセイヨウオオマルハナバチの計画的な半減に向けてハウスの被覆資材等を支援するとしている。

16年産収穫量 ミカン4%増、リンゴ6%減

農水省はこのほど、「16年産ミカン、リンゴの結果樹面積、収穫量及び出荷量」を公表した。それぞれの結果樹面積は、過去最低となった。

ミカンの結果樹面積は4万1500haで、前年産に比べ700ha(2%)減少した。収穫量は80万5100t、出荷量は71万7500tで、それぞれ前年産比2万7300ha(4%)、3万3600t(5%)増加した。

10a当たりの収量は1940kgで、早生温州が7月から8月にかけて高温・少

雨の影響により果実の肥大が抑制されたこと等から、前の裏年である14年産より100kg(5%)減少した。

リンゴの結果樹面積は3万6800haで、前年産に比べ200ha(1%)減少した。収穫量は76万5000t、出荷量は68万4900tで、それぞれ前年産比4万6500t(6%)、4万2800t(6%)減少した。

10a当たりの収量は2080kgで、開花期の低温の影響で着果数が少なかったこと、6月の日照不足及び8月の少雨の影響で果実の肥大が抑制されたこと等から、前年産より110kg(5%)減少した。

岡山県農林水産総合センター畜産研究所

乳牛 夏期のTMR調製条件
加水による臭気の影響も

TMRの変敗防止法として、有機酸の添加や調製回数の増加等が行われている。しかし、コストや作業負担が多いという問題がある。

岡山県農林水産総合センター畜産研究所は、夏期のスーダン乾草及びチモシー乾草、配合飼料を材料としたTMRの加水条件を比較し、発熱、臭気及び嗜好性について調査を行った。

発熱にともなう臭気の変化と嗜好性試験

水分を50%に加水したTMRを用いて、30℃に設定した室内での温度、臭気及び乳牛の嗜好性の変化を調査した。ホルスタイン種搾乳牛3頭を供試

した。その結果、加水8時間後に発熱が始まり、その後は調査終了まで温度が上昇した。

臭気は、発熱開始までほぼ横ばいに推移したが、発熱開始後は時間経過とともに強くなり、調査終了時の発熱後9時間では増加前の3.5倍まで増加した(図)。

嗜好性は、発熱開始時点までは調製直後のものとほぼ同等であったが、発熱後は時間の経過とともに減少した。とくに臭気の上昇が大きくみられた発熱後6及び9時間で極端に低下した。発熱開始と嗜好性低下のタイミングはほぼ同じであることから、発熱による

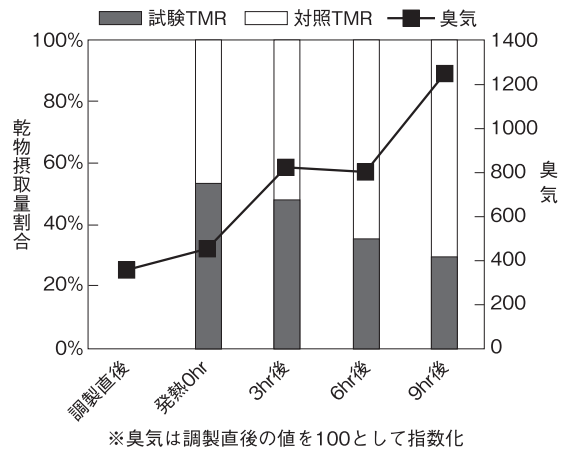
臭気の発生の影響があると考えられた。

同研究所は、この試験の他に加水しないものから水分を75%まで高めたTMRの発熱状況と嗜好性の比較も行った。その結果、加水した中で最も発熱が遅かったのは水分40%で調製後10時間まで発熱しなかった。

加水しない場合にも発熱は起こらなかったが、嗜好性は明らかに劣るため、夏期TMRとしては水分40%が適していることが明らかになった。

夏期TMRに加水した時の条件で水分20%と40%のTMRを給与した場合を比べると、乳生産性及び乾物摂取量に差がないという報告もあるが、同研究所は暑熱のストレスでルーメン機能が減退した搾乳牛に対しては、嗜好性

図 30℃条件下での嗜好性及び臭気変化



※臭気は調製直後の値を100として指数化

を下げない状態のTMRを給与できるかが重要であるとしている。

調製直後の嗜好性が良好で、発熱によって嗜好性が低下しない状態のTMRを給与することが必要となるとした。夏期TMR調製は、水分40%にして、気温が高くなる日中の調製間隔を10時間以内とする1日2回の調製が最適だとしている。

長野県畜産試験場

肥育豚 乾燥酒粕を30%配合給与
発育良好でコスト約1割減

養豚経営では、生産コストの低減をしつつ、消費者の好みに合った特色ある豚肉を生産する必要がある。

長野県畜産試験場は、飼料の栄養価を考えて乾燥酒粕を30%まで配合し、肥育豚に給与しても発育には影響せず、特色ある豚肉となり、飼料費が1割程度低減するという試験結果を公表した。

①肥育前期同粕給与による発育試験

LWD去勢肥育豚18頭を用いて1区当たり6頭ずつ配置した。試験区の飼料には、同粕を15% (15%区) または30% (30%区) 配合した。対照区には、トウモロコシ、大豆粕を主体とした飼料を給与した。

体重が30~70kgの間、1頭ずつ飼育して、飼料を不断給じし、各個体の発育と飼料要求率(体重を1kg増加させるために必要な飼料の重量)の調査を行った。今回使用した同粕の粗たん白質割合(CP)は16.6%で、日本標準飼料成分表の33.1%と比べて低かった。給与飼料のTDN(可消化養分総量)は、各区ともに肥育前期豚の養分要求量よりやや多く、CPはほぼ要求量の値となった。

発育は、各区とも日増体重1100g以上、飼料要求率2.5前後と良好で区間に有意な差はなかった(表1)が、飼料要求率から試算した肥育前期豚の飼料必要量は、30%区が対照区より約6kg増加した。

②肉質及び脂肪質への影響調査

WLD去勢肥育豚15頭を用いて、試験区(15%区、30%区)と対照区に1

区当たり5頭ずつ配置した。群飼で豚の体重が70kgになるまでは市販子豚飼料を給与し、各区の平均体重が約70kgになった時点から同粕を不断給じした。体重が115kgになった個体から試験を止め、発育と飼料要求率を調査した。また、と畜後に試験豚全頭の枝肉形状、肉質及び脂肪質を調べた。

試験期間が暑熱期(7~8月)であり、群飼だったため日増体重は各区と

表1 乾燥酒粕給与が肥育前期豚の発育及び飼料要求率に及ぼす影響

	開始体重(kg)	終了体重(kg)	日増体重(g)	飼料要求率	試算による飼料必要量(kg)*1
15%区	32.0	70.8	1,145	2.44	98
30%区	30.4	70.7	1,116	2.55	102
対照区	31.3	71.1	1,167	2.41	96

飼料要求率:増体1kgに必要な飼料量。
*1:体重30kgから70kgまでの40kgの増体に必要な1頭あたりの飼料量を要求率から試算。

も1000gに満たなかったが、区間に大きな差はなかった。一方、飼料要求率は15%区、30%区ともに対照区より高く、試算した飼料必要量は対照区と比較して15%で約6kg、30%区で約12kg増加した。

枝肉成績では、同粕の割合の増加にともない背脂肪が厚く、ロース断面積は小さくなった。肉質では、ロース肉の筋肉内脂肪割合が増加し、肉色の明度は高くなった(表2)。スライスしたロース肉のドリップロス、同粕給与各区が対照区より少ない値だった。また、脂肪融点は対照区より高くなった。

表2 肥育後期豚への乾燥酒粕給与が枝肉成績、肉色及び肉質に及ぼす影響

	歩留り(%)	背脂肪の厚さ(cm)	ロース断面積(cm ²)	肉色 ¹			脂肪色 ¹			剪断力価(kgf)	筋肉内脂肪割合(%)
				L*	a*	b*	L*	a*	b*		
15%区	69.4	3.1	22.1	51.8	2.6	5.7	77.6	1.0	4.3	3.3	4.3
30%区	70.8	3.2	21.0	53.1	2.8	6.5	78.9	0.3	3.8	3.1	5.4
対照区	71.7	2.8	23.4	49.8	3.2	5.7	78.3	0.6	3.8	3.2	2.7

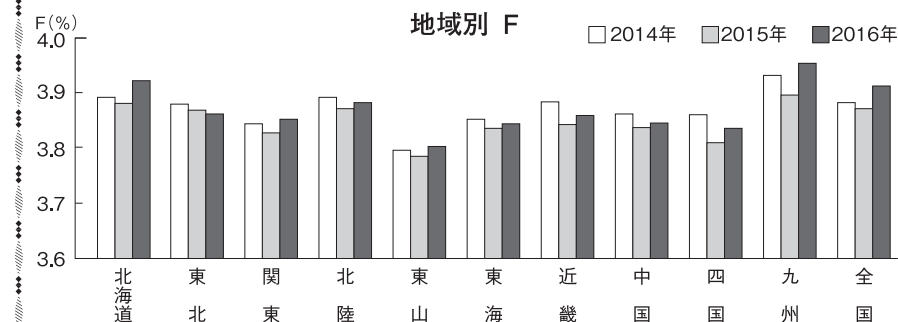
1:と畜翌日における分光色差計による測定値。(L*:明度、a*:赤色度、b*:黄色度) 剪断力価:肉の柔らかさを示す値。
※長野県畜産試験場の資料を基に作成。

16年 路線別生乳成分調査
全国平均乳脂肪率は3.911

(公財)日本乳業技術協会はこのほど、16年1~12月の全国集乳路線別生乳成分調査(第42報)の結果をまとめた。集乳路線とは、工場に搬入された生乳をローリー単位で表した調査路線数のこと。

路線数は前年より146路線増加し、7843路線となり、1日当たりの全生乳生産量に対する調査対象乳量の割合は、40.6%(前年40.2%)だった。

乳脂肪分(F)の変動は、全国平均が3.911%(前年比0.037%増)と前年並



みとなった。地域別にFをみると、全国平均を上回った地域は、北海道(3.924%)、九州(3.955%)だった。

通年平均でF3.5%未満の乳量割合は、0.7%(前年1.0%)、3.5%以上3.6%未満の割合は1.5%(同2.2%)となり、地域別のF3.5%未満の割合は北海道(0.9%)が平均より高い比率となった。

無脂乳固形分(SNF)の変動は、全国平均が8.797%(前年比0.006%増)と前年並みとなった。地域別にみると、全国平均を上回った地域は北海道(8.802%)、北陸(8.801%)、東海(8.816%)、九州(8.803%)だった。

通年平均は、8.3%以上8.4%未満の割合は0.0%(前年0.0%)だった。

また、8.5%未満までの割合は0.1%(同0.2%)と前年に比べて減少した。

富山県農林水産総合技術センター畜産研究所

黒毛和種 超音波装置による肉質診断
21ヵ月齢時点で肉質推定可能

黒毛和種肥育の低コスト化のため、肉質を維持しつつ、出荷月齢を短縮させる肥育の技術開発が望まれている。超音波肉質推定技術による早期の肉質予測は期間短縮につながるが、枝肉成績との関係が明らかではない。

富山県農林水産総合技術センター畜産研究所は、同研究所の黒毛和種去勢牛26頭で、9ヵ月齢から出荷(平均27ヵ月齢)までの間、市販の超音波肉質診断装置を用いて計測を行い、経過月齢にともなう測定値の変化を調べた。その結果、各産肉形質(ロース芯面積、脂肪交雑、バラ厚、皮下脂肪厚)が大きく増加する時期は、ロース芯面積と皮下脂肪厚及びバラ厚で9ヵ月齢以降から21ヵ月齢にかけて、脂肪交雑で15ヵ月齢以降だと分かった。

また、供試した肥育牛をと畜後の枝肉成績別に分け、各産肉形質の測定値と実際の枝肉成績との比較を行った。

ロース芯面積は、と畜後の数値が60cm²以上区では、21ヵ月齢時点で60cm²未満区よりも有意に大きいことが分

かった。

脂肪交雑では、超音波肉質診断画像を分析し、BMS No. を推定した。その結果、21ヵ月齢において5等級と3等級の牛群間で有意な差が認められた(図)。さらに、24、25ヵ月齢では3等級の牛群に対して5等級と4等級の牛群が、出荷直前では5等級の牛群が他の群よりも有意に高かった。

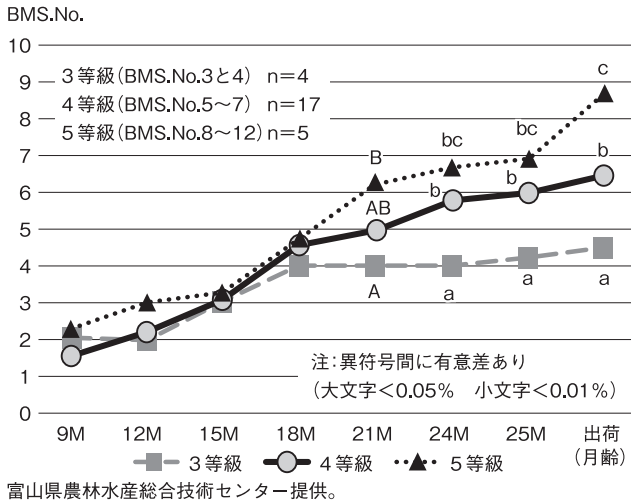
バラ厚が薄い区(7.5cm以下)と厚い区(8.5cm以上)では、肥育期間中ほぼ同程度の差のまま成長した。測定期間中の値で、薄い区が厚い区を上回ることにはなかった。

皮下脂肪厚の推移では、21ヵ月齢から2cm以下の薄い区と3cm以上の厚い区で有意な差がみられ始め、その後拡大していった。

これらの試験結果より、21ヵ月齢時点での超音波診断測定値から、と畜時枝肉成績の判別は可能であると考えられた。ただし、脂肪交雑については28ヵ月齢までBMS No. の値が増加する場合もあり、個体によっては、肥育後期においても脂肪交雑の発達が認められた。

同研究所は、超音波肉質診断を利用することで、今後、肥育期間の早い段階で飼養技術の改善や適正な出荷時期が決定できるようになるため、農家の生産性向上が期待できるとした。

図 肉質等級別にみた脂肪交雑の推移



牛の暑熱対策 畜舎環境・管理重要

今夏、全国的に高温見込み

気象庁の「全国3か月予報」によると、6～8月は全国の気温が平年より高くなると見込まれている。家畜の生産性維持・向上のために、例年より早くから暑熱対策を行う必要がある。

アニマルウェルフェア(動物福祉)の目標では「家畜の物理的、熱の不快感からの自由」が定義され、暑熱は牛にとって多大な負担となっている。牛が快適に過ごせる適温域は15～25℃で、この温度を超えると体内の熱を維持するために、熱の放散活動が活発になり、エネルギー消費量が增大する。雨季から夏季にかけて高温多湿環境は、食欲も減退するため飼料効率の低下を招きやすい。

適温域を超えた暑熱が原因となり、哺育牛では、採食量の減少にともなう増体率や栄養度合いの低下が起きる場合がある。乳牛では乳量の、繁殖牛では受胎率の低下を招くことがある。暑熱による生産性が下がることを避けるために、早期から対策を行うことが重要である。

肉用牛における対策について、全開連の「交雑種牛飼養管理の実践」によると、換気扇による送風、屋根への散水、牛舎内の散霧を行い、牛の体感温度を下げるのが重要としている。さらに、飲水量が多くなるので、きれいな水を十分確保することも必要としている。加えて、「寒冷紗」や「よしず」による日除け、屋根裏への断熱材の貼り付けや屋根をペンキで白く塗ることも効果的と

している。

牛の暑熱対策のポイントについて、中央畜産会作成のリーフレットから紹介する。以下の方法を組み合わせることが重要としている。

畜舎環境面から

畜舎外から畜舎内の温度を下げるために、樹木や遮光ネット等の設置や屋根・壁・床への断熱材の設置を行う。遮光ネットに植物を這わせることで効果を高めている事例もある。

また、屋根への石灰散布を行うことで、畜舎内の気温が約5℃低下したという事例がある。これは、石灰を水に溶かして石灰乳を作り、動力噴射器で屋根に吹きつける方法。利用上の注意点としては、石灰乳がダマにならないように電動ドリルでかき混ぜることや効果を長持ちさせるために全体にムラなく丁寧に吹きつけることなどが挙げられる。

畜舎内からは、換気扇や扇風機での送風が重要な対策となる。とくに、牛舎壁面に換気扇を設置する「トンネル換気」が有効となる。

飼養管理面から

体感温度を下げるために、密飼いを避ける。乳牛では、毛刈りを行うことも効果的。

飼料給与時の工夫として、涼しい時間帯に給与を行うとともに、回数を増やすことが重要となる。さらに、良質で消化率の高い飼料を与えることや必要に応じてビタミンやミネラルを給与し、栄養不足を補うことも大切である。

(地独)北海道立総合研究機構畜産試験場

黒毛和種 DNAデータで繁殖雌牛選抜
生産現場での改良効率が向上

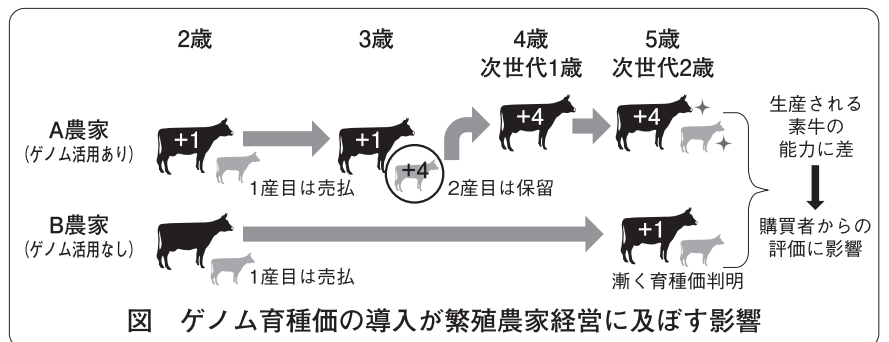
良質な黒毛和種を安定的に生産するためには、種雄牛の改良と交配する繁殖雌牛の選抜が重要である。牛の遺伝的能力は育種価で表され、交配させる際の指標となる。

一般的に育種価は、推定育種価を指し、これは産子の枝肉成績から算出した能力値で、精度は高いが算出するまで約5年かかる。早期に能力を予測する指標として、牛の父と母の推定育種価から算出した期待育種価が用いられるが、精度はやや低い。

推定育種価より早く算出でき、期待育種価より高精度な指標が求められる。今回、(地独)北海道総合研究機構

畜産試験場の研究成果「ゲノム育種価を活用した黒毛和種の早期選抜法」から要点を紹介する。

全国の牛群(黒毛和種肥育牛:約1万5000頭)から得られたDNAデータを蓄積し、全国の研究機関が共同で作成した関係式を用いて若雄牛・雌牛の能力(ゲノム育種価)を算出した。そのゲノム育種価を推定育種価と比較すると、中程度以上の相関が認められた。これは、期待育種価と推定育種価の相関よりも高く、能力指標としてのゲノム育種価の有効性が明らかになった。今後、期待育種価の代替と期待される。



地方独立行政法人北海道立総合研究機構(道総研)提供。 ※牛の数字は能力値の指標(大きいほど、高い能力が見込まれる)。

生産現場では、繁殖雌牛を選抜する際にゲノム育種価を活用できるとしている。まず、生産現場で0才の後継雌牛候補の毛根を採取し、同試験場に送付する。同試験場では、毛根を元に受付後1～2ヶ月でゲノム育種価が算出される。判明した指標を参考に、生産現場で後継雌牛候補の選抜を行い、体型や繁殖性といった種牛性を確認した後、後継牛生産に活用する。

この選抜法を導入することで、従来

は雌牛の能力推定に約5年かかったが、2歳の時点である程度予測できるようになる。繁殖農家経営においては、世代の進んだ能力の高い素牛を生産し、購買者からの評価が高まるのが期待される(図)。

同試験場は今後、改良効果を実証するとともに、道内への普及・定着を図る予定とした。既に道内モデル地域で一般農家の繁殖雌牛での活用を始めている。

畜産物需給見通し

牛枝肉

交雑種、全国出荷頭数の増加
続き軟調に

5月上旬の相場は大型連休明けの補充買いで堅調だったが、以降は予想以上の需要の低迷により、各品種とも弱含みとなった。とくに交雑種は大きく下げた。全国総と畜頭数は全体で前年同月に比べ減少しているが、交雑種は増加が継続している。加えて、和牛の相場が下がったことで、代替需要も縮小したとみられる。

今後も梅雨入りで消費は落ち込むと見込まれ、全体的に軟調な相場が継続すると予想される。

【乳去勢】5月の大阪市場乳去勢牛B2の税込み平均枝肉単価は、1002円(前年同月比90%)となった。前月に比べ21円下げた(B3は上場なし)。

農畜産業振興機構は、6月の乳牛(雌含む)の全国出荷頭数を2万8100頭(同93%)と減少が継続すると予測している。6月の輸入量は、4万2500t(同108%)の予測。内訳は、冷蔵品が2万800t(同98%)、冷凍品が2万1800t(同120%)。冷凍品は、前年同月の輸入量が少なかった反動もあり、大幅に上回ると予測している。

【F₁去勢】5月の東京市場交雑種(F₁)去勢牛税込み平均枝肉単価は、B3が1593円(前年同月比89%)、B2は1270円(同78%)となった。前月に比べ、それぞれ65円、153円下げた。

同機構は、6月の交雑種(雌含む)

の全国出荷頭数を1万8300頭(同106%)と引き続き前年同月を上回ると予測している。

【和去勢】5月の東京市場和去勢牛税込み平均枝肉単価は、A4が2465円(前年同月比92%)、A3は2205円(同87%)となった。前月に比べ、それぞれ78円、44円下げた。

同機構は、6月の和牛(雌含む)の全国出荷頭数を3万4700頭(同101%)と前年同月をわずかに上回ると予測。3品種全体の出荷頭数は8万2500頭(同99%)と予測している。

全体の出荷頭数はやや減少する予測だが、不需要期となり、イベントも少ないことから、引き合いは弱まると予想される。4月まで

底堅かった交雑種も、引き続き、全国出荷頭数が前年同月を上回る予測のため、軟調な相場展開が続くと予想される。また、同じ等級内で肉付・肉質による価格差が広がっていくとみられる。各品種とも弱気な展開となり、5月後半の相場の弱もちあいで推移か。

向こう1ヵ月の大阪市場の税込み平均枝肉単価は、乳去勢B2が950~1000円、東京市場の同枝肉単価は、F₁去勢B3が1450~1550円、B2は1200~1300円、和去勢A4が2350~2450円、A3は2150~2200円での相場展開か。

5月の子牛取引状況

(単位:頭、kg)

ブロック名	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		単価/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	464	737	301	299	207,925	210,145	691	703
	F ₁ 去	1,078	1,069	321	316	458,978	488,601	1,430	1,546
	和去	1,275	1,442	314	310	842,162	863,966	2,682	2,787
東北	乳去	6	18	303	280	226,080	208,620	746	745
	F ₁ 去	23	22	289	289	428,150	434,405	1,484	1,506
	和去	1,893	2,192	308	305	826,086	860,570	2,682	2,817
関東	乳去	10	26	216	236	126,684	151,408	586	640
	F ₁ 去	237	202	308	307	452,255	459,759	1,470	1,500
	和去	714	948	268	263	777,628	816,418	2,905	3,106
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	-	1	-	104	-	273,240	-	2,627
東海	乳去	19	21	287	282	206,507	205,766	720	729
	F ₁ 去	85	90	306	297	464,412	459,119	1,517	1,546
	和去	440	290	268	257	849,402	833,734	3,171	3,249
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F ₁ 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	384	425	261	259	871,008	833,749	3,337	3,216
中国	乳去	82	113	276	277	203,527	182,434	738	658
	F ₁ 去	238	223	295	299	440,571	445,158	1,492	1,491
	和去	522	865	291	224	814,650	841,898	2,803	3,752
九州・沖縄	乳去	17	49	295	278	186,141	199,954	631	719
	F ₁ 去	164	550	301	301	433,382	450,619	1,440	1,495
	和去	5,883	7,324	288	291	864,184	888,173	3,001	3,051
全国	乳去	598	964	296	293	205,481	204,671	694	699
	F ₁ 去	1,825	2,156	313	309	453,269	469,932	1,448	1,521
	和去	11,111	13,487	291	291	846,928	870,334	2,910	2,991

注) (独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。
価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。-は上場がなかったことを示す。
関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

国産牛肉 前年比6.4%上げ

16年度下半期の食肉価格動向

農水省が公表している「食品価格動向調査」によると、国産牛肉の全国平均小売価格が1年間で6.5%上昇していることが分かった。輸入牛肉と豚肉では、大きな変化はなかった。

同調査は、各都道府県10店舗(全国470店舗)の小売店を訪問する方法で、食品の小売価格について毎月行っているもの。価格は、特売等を除いた全調査店舗の単純平均(税込み)。食肉の調査品目は、国産牛肉(冷蔵ロース)、輸入牛肉(冷蔵ロース)、豚肉(ロース)等で、各品目100g当たりの平均価格として算出している。

国産牛肉の16年度下半期(16年10月~17年3月)の結果を平均すると793円で、前年同期比では6.4%上昇し、金額では48円上げだった。

輸入牛肉は平均302円で、前年同期比では0.7%上昇し、金額では2円上げだった。前年度から大きな変化はなく、300円前後で推移している。

豚肉は平均262円で、前年同期と同額だった。価格の大きな変化はなく、前年と同様だった。

直近の17年5月をみると、国産牛肉は802円で、前年同月比で3.0%上昇し、金額では23円値上げとなった。800円以上を記録したのは、調査開始以来3度目、いずれも直近半年以内(17年1月、3月)だ。調査を開始した15年10月の683円と比較すると、17年5月では100円以上の上昇となっている。国産牛肉の小売価格は高値傾向にあることがうかがえた。

なお、輸入牛肉は302円で前年同月比4円下げ、豚肉は262円で同4円上げと大きな変化はみられなかった。

豚枝肉

暑さによる発育への影響で、相場強もちあいか

5月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が565円(前年同月比95%)、中物は547円(同96%)となった。前月に比べ、それぞれ56円、63円上げた。大型連休明けの補充買いの後、全国出荷頭数の伸び悩みなどから、安定的な相場が続く、月末には続伸した。

農水省食肉鶏卵課は、全国の出荷頭数を6月は131万4000頭(同101%、過去5年の同月平均比103%)、7月は123万8000頭(同99%、同94%)とほぼ前年並みを予測している。

農畜産業振興機構は、6月の輸入量

の総量を7万4000t(同98%)と予測している。うち冷蔵品は、好調な需要を背景に、前年同月を上回る3万1700t(同102%)、冷凍品は、在庫を調整する動きもみられることから、前年同月を下回る4万2300t(同95%)と見込んでいる。

この時期は、梅雨入りなどで消費が落ち込む一方、中元への手当てが本格化する。また、出荷頭数はほぼ前年並みの予測だが、今夏は、すでに暑くなっており、肉豚の発育に影響が出ることも予想される。相場は、強もちあいで推移か。

向こう1ヵ月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が580~600円、中物は540~560円での相場展開か。

素牛

スモール

乳牛は品薄継続でもちあひ、和牛は小幅安か

【乳素牛】5月の素牛価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は、乳去勢が20万5481円(前年同月比94%)、F₁去勢が45万3269円(同102%)となった。前月に比べ、乳去勢は810円上げ、F₁去勢は1万6663円下げた。F₁の枝肉相場が出荷頭数増などから軟調となっており、素牛相場に影響した。

今後も両品種の素牛の品薄状況が継続することが見込まれ、ともにもちあひの展開が予想される。

【スモール】5月の全国主要25市場の1頭当たり税込み平均価格(農畜産業振興機構、速報値)は、乳雄が12万444円(前年同月比89%)、F₁(雄雌

平均)が30万122円(同113%)となった。前月に比べ乳雄は3616円、F₁は2035円上げた。取引頭数は前年同月に比べ、両品種とも減少傾向で推移している。

両品種とも出回り頭数の減少が続く見通しは変わらず、今後ももちあいで推移か。

【和子牛】5月の和去勢価格(左表)の全国1頭当たり税込み平均価格は84万6928円(前年同月比101%)となり、前月に比べ2万3406円下げた。依然として高値基調であるが、5ヵ月連続で前月を下回った。

枝肉相場が予想より下がっており、素牛の導入は慎重となっている。今後も梅雨入りなどで需要が低迷し、枝肉相場は軟調が見込まれる。そのため、素牛相場は小幅安の展開か。